

タカナベカイドウとは？

・タカナベカイドウの花

タカナベカイドウはバラ科リンゴ属で右の写真に示すように3月中・下旬に約3センチの淡いピンク色で桜に似た花を咲かせます。

ハナカイドウやノカイドウよりも花柄が2センチと短いのが特徴です。



(2009年3月19日撮影)

・タカナベカイドウの歴史

注目されたきっかけは1985年高鍋高等学校事務室の花瓶に挿してあった「カイドウの花」が当時、同校に勤めていた野生植物研究者 南谷忠志さんの目に留まりました。「なぜ、カイドウの花がこんな所」と調べると高鍋町固有のカイドウで、一般に知られているカイドウとは別物だということが分かりました。その後2002年には高鍋自然愛好会や研究者らが成木調査を行い、2009年4月現在確認されているだけでも24本だと分かりました。また増殖の為に栽培も行われています。2003年3月21日に開催された「タカナベカイドウフォーラム」で「タカナベカイドウ」と命名されました。

・「タカナベカイドウ」について

一番古いもので樹齢150年と推測されています。戦後、高鍋町南牛牧の湿地の自生木を住民たちが自宅に移植して育てたと言われていました。また、湿地にあり桜の花に似ていたことから「牟田桜」と呼ばれて親しまれていました。

タカナベカイドウ愛好会「タカナベカイドウ：アラカルト」より
宮崎県高鍋農業高等学校 林業経営研究班 3A 土持 勇太